校長室だより～燦燦～ №７６２

屋上への階段

2023.6.1

校舎２階へと避難し、児童は、２階図書室前に整列する。点呼により人数を確認後、待機となる。各担任は、防災頭巾や防寒着などの着用を確認する。教頭は、出張先から帰校する。防災無線や広報車のアナウンスは校内では聞き取れない。

１５時１４分には、大津波警報の情報が更新される。予想される高さが１０ｍ以上に上昇する。校長は、予想される津波の高さの上昇により、校舎２階でも危険と考え、屋上への避難を決断した。敷地のかさ上げ約２ｍ＋４ｍ（１階）＋４ｍ（２階）＋２ｍ（標高）＝１２ｍと計算し、津波の高さが１０ｍでも屋上なら助かると判断した。

１５時１９分には、停電によりテレビからの情報収集が不可能となる。児童、保護者、地域住民らが屋上へ避難する。人数を確認後、屋根裏倉庫の外、壁際に座って待機した。教務主任は、児童を迎えに来た保護者に対応し、自宅には戻らずに坂元中学校にまっすぐ避難することを条件に６人の児童を引き渡した。中浜区長、地域住民、町職員などが来校した。

１５時５０分頃に津波が到達する。校舎外にいた保護者、地区住民、１階にいた教職員、かけつけた町職員が屋上に避難する。教職員、保護者、地区住民、町職員など大人全員で児童を守るという意識を共有する。津波を見せない配慮として、児童を屋根裏倉庫の中に避難させた。

１６時頃に大津波が襲来する。津波により屋根裏倉庫に若干の浸水がある。担任の指示で児童は中にあった机やいすに乗るなどの対応をとる。ガラスの割れる音や物が壊れる音が屋上まで響く。沖に高さ２０ｍはあろうかと思われた第３波、第４波が確認されるが、第１波、第２波の引き波とぶつかったことで低くなり、屋上への到達をまぬがれる。

日没前になり、屋根裏部屋で一夜を過ごす準備を始める。段ボールなどを床に敷き、学芸会の劇の衣装を毛布代わりにするなどの寒さ対策をとる。卒業生のタイムカプセル（衣装ケース）を用いて、仮設トイレを設置する。避難者は、児童５２人、教職員１２人、町職員３人、保護者・地区住民２３人の合計９０人だった。校長は、以下のように短い言葉で、屋根裏倉庫で一夜を過ごすことを告げる。

最大の危険は去りました。でも、今夜はここに泊まります。食べ物はありません。水もありません。とても寒くなります。でも朝までがんばろう。あたたかい朝日は必ず昇るから。

日没後には、余震が続く中、大人たちが２階を捜索し、音楽準備室でブルーシートが流されずにあることを発見し、床に敷く。体育館を捜索し、真空パックされた非常用毛布５０枚が流されずに見つかり、児童らに２人で１枚ずつ配布される。

２４時から７時まで気温が氷点下となる。教職員は、１時間交代で寝ずの番にあたる。５時頃には、児童に見せられない光景はないかなどや坂元中学校への徒歩移動が可能かを大人たちが事前に調査する。児童は徒歩による移動が困難な状況が把握されたため、屋根裏倉庫への避難を継続した。

６時頃、松島方面へ向かう自衛隊のヘリコプターの編隊のうちの１機が校庭に着陸した。９０人は、５回に分けて町民グランドと体育文化センターへ搬送された。ヘリコプターによる搬送のため、児童は周辺の遺体などを見ることなく避難できた。教職員と地域住民は、避難所での使用を想定し、非常用毛布とブルシートを持ち出して、ヘリコプターに搭乗した。

屋上への避難を決断した校長は、一番最後に屋上への階段を上っている。今度、この階段を降りるときは、生きて戻るときだと、強く心に誓ったそうである。結果的に、大津波が襲来するまでには１時間あまりの時間があった。児童の足でも坂元中学校までの避難は可能だった。しかし、１０分で津波が来るという警報のもと、水平避難を選択するのはむずかしい。偶然が重なり、垂直避難でも全員が助かった。屋上への階段を上る校長の心情はどのようなものだったのだろうか。